



醍醐遺跡—山麓の縄文遺跡—

財団法人 滋賀県文化財保護協会
主任 中村 健二

1. はじめに

伊吹山の西側、長浜市（旧浅井町）に位置する醍醐遺跡は、滋賀県遺跡地図には醍醐A遺跡、醍醐B遺跡の2つの遺跡として登録されています。このうち、今回紹介する縄文時代の遺物が多く出土した地点は、現在の醍醐B遺跡にあたります。

醍醐遺跡の調査は、小江慶雄氏によって昭和26年から昭和27年にかけての本格的調査が行われ、その後、浅井町教育委員会によって平成10年から平成13年にかけて確認調査が行われました。最初の調査の頃は、近畿地方を含めた西日本では、縄文時代の遺跡の発見例は稀であり、醍醐遺跡の調査で見つかった

た遺構や遺物は、当時の縄文時代研究の重要遺跡として研究者から注目を集めました。

今回、紹介するのは、最初の小江慶雄氏による調査を中心にいたします。

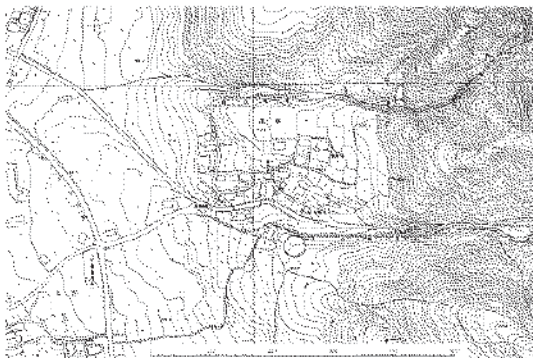
2. 立石をもつ配石遺構の発見

醍醐遺跡の調査では、多くの遺物が出土した以外に、花崗岩質で人頭大の円い石や大小の角ばった石などを列に並べたり、長さ78cm、厚さ22cmの細長い石を地面に立て（立石）、その石を中心に11個の石を直径約1.5mの円形に並べた配石遺構が見つかりました。配石遺構は縄文時代に流行する人頭大の石を円形、方形あるいは列状に人工的に並べたもので、何らかのお祭りに使われていたと考えられています。

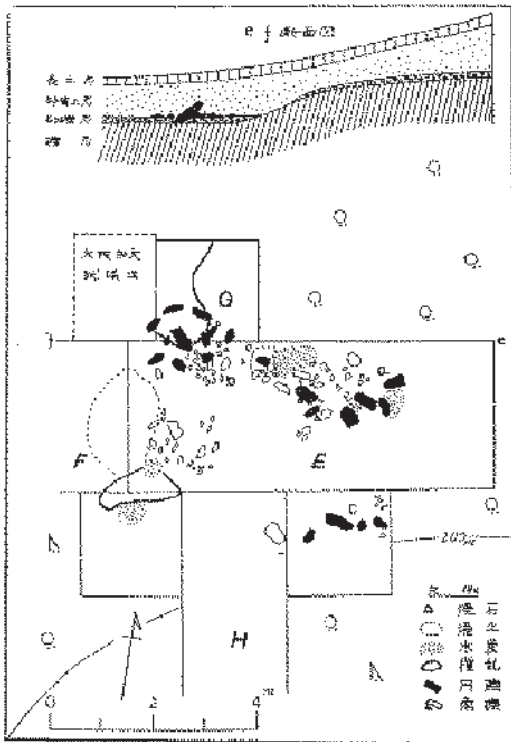
配石遺構を構成する石の中には、焼けて赤くなったもの、周囲に火を焚いた痕（焼土）や木炭などが多く見つかっています。こういった点から配石遺構で行われたお祭りには、火を焚くことが大きく関わっていることもわかります。この遺跡では、配石遺構の下から



醍醐遺跡遠景



醍醐遺跡位置図



配石遺構全体図（小江1953「滋賀遺跡発見の遺物石製遺物」より転載）

穴は見つかりませんでした。他の遺跡では、墓穴が見つかることが多いことから、配石遺構は墓地などに関連して祖先を祭るために用いられたと考える意見もあります。

これらの配石遺構はいつ作られたのでしょうか。それは出土した土器から判断されています。醍醐遺跡からは縄文時代中期初め頃（約5000年前）から中期終わり頃（約4000年前）までの時期の遺物が最も多く、若干、縄文時代後期中頃（約3500年前）の遺物が少量出土しています。最近の発掘調査の結果から滋賀県では、配石遺構は縄文時代中期の終わり頃に出現し、後期に流行を迎えることがわかってきています。こういった他の遺跡の例を参考に研究者の間でも時代的に古い中期の終わりとする説と新しい後期中頃とする説に分かれています。

3. 東西交流の縄文土器

出土土器をみれば、中期の初め頃の土器は、

粗くて硬い縄で縄文をつけ、貝殻を押しついたり、隆帯を貼り付けて文様としたものなど、瀬戸内地方と共通した土器が用いられています。その後、中期の終わり頃になると、長野県を中心とした中部地方から新たな住居形式、配石遺構などの遺構や浅鉢という土器の形や打製石斧などの新たな遺物が伝わるなど、大きな影響を受けます。

こういった大きな文化の波の中、装飾性に富む東日本縄文土器の影響下に東海地方と似た土器が醍醐遺跡にも伝わります。このように土器からみたとき、醍醐遺跡で土器が使われ始めた頃は、瀬戸内など西の地域との結びつきが強く、後半になると東海地方を含めた



上、中期の初め頃（瀬戸内地方と共通する土器）
下、中期終わり頃（東海地方と共通する土器）

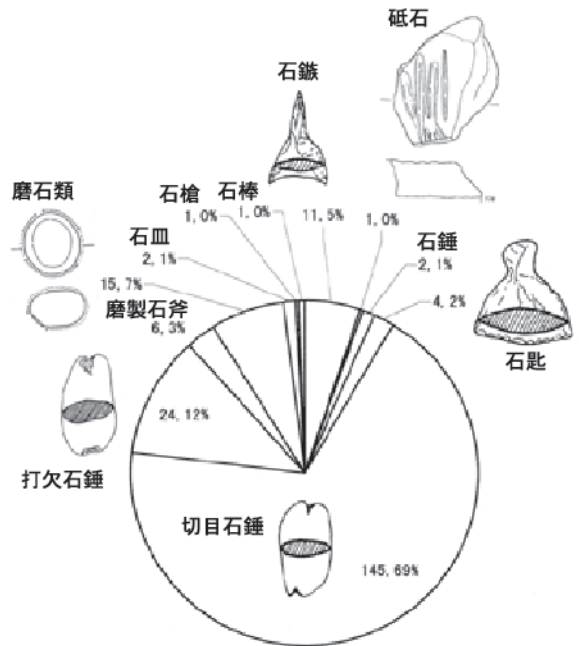
東の地域とのつながりをもつようになることがわかります。このうち中期の終わりの土器は、発掘調査がされた昭和26・27年段階では、近畿地方に良好な資料がなく、研究者にとっては、近畿地方の縄文土器研究をする上での欠かせない土器となりました。こうした土器は昭和40年発行の『日本考古学』Ⅱでは、近畿地方の縄文時代中期後半を代表する醍醐Ⅱ式、醍醐Ⅲ式として、平成8年発行の『日本土器辞典』では、醍醐式土器として解説されるなど、今なお、近畿地方の縄文時代中期後半を代表する土器として知られています。

4. 石の道具箱

土器以外の遺物には、石器があります。矢の先に取り付けて陸上動物を捕獲するための石鏃、川で魚を捕獲するための網の錘である切目石錘、切目石錘と同様に魚を取ったり、編み物の錘として利用した打欠石錘、木の伐採のために使用した磨製石斧、木の実を磨り潰したりするときの台である石皿、木の実を叩きつぶしたり、石器を製作する際に使用した磨石・敲石類、穴をあけるための石錐、携帯用のナイフである石匙、磨製石斧などを研ぐための砥石などが出土しています。

石器で最も多いのは長さ5cm前後の河原石の両端に擦り切りにより紐を掛ける部分を作った切目石錘と打ち欠きによって紐を掛ける部分を作った打欠石錘です。これらを合わせた石錘が169点で、醍醐縄文人は石錘を取り付けた網を用いて草野川などで魚を取っていたことは明らかです。これらの川魚は醍醐縄文人の重要な食料源であったと考えられます。

県内の網漁業は、縄文時代早期の終わり頃に琵琶湖岸で、打欠石錘を用いて始まります。琵琶湖の東岸の山麓地域や平野部の河川においては、この頃の本格的な漁業の痕跡は見つかっていません。ようやく、切目石錘が縄文時代中期になり、滋賀県内にも普及し、醍醐遺跡や木之本町古橋遺跡などの山麓に近い遺



石器組成図

跡でも河川を対象とした網漁業が活発化します。醍醐遺跡出土の切目石錘は、まさに滋賀県地域に導入し始めた頃の様相を示しています。また、調査が行われた当時は、総数145個という多数が出土することから、その多さにも注目が集まりました。

漁業用の道具に次いで多いのは、植物加工や石器を作るために使用する磨石・敲石類の15点です。その他、狩猟用の石鏃が11点と比較的多く出土しています。縄文人の主食とされるドングリなどの木の実を加工する道具やシカやイノシシなどの陸上動物を捕獲するための道具など、魚、肉、木の実などの縄文人の日常食物を得たり、加工したりするための道具で大半を占めていることがわかります。

5. 縄文人の再利用

醍醐遺跡から出土した遺物の中には、元々の用途で使用されなくなったものを別の用途のものとして再利用した遺物があります。それは土製円盤と呼ばれるもので、壊れた土器の一部を使って、直径5cm程度の大きさに周

罎を打ち欠いて円形にした土製品があります。これらは40個近く出土しており、円く加工した側縁を丁寧に磨き込んだものや、円形に粗く打ち欠いたものなどがあります。これらの用途については、お祭りの道具や土器に穴があいたときの補修具、換算具あるいは携帯用水筒の蓋など多様な用途が考えられています。しかし、いまだどれが正しい説か定まてはいません。

6. 広域交流の証

醍醐遺跡から出土した石器のうち石鎌や石匙の材質をみれば、チャートと呼ばれる地元周辺で採れる石を主に使っています。他にサヌカイトや黒曜石なども使われています。湖北地域の縄文時代遺跡もまた、醍醐遺跡と同様にチャートを石鎌や石匙などの材料として使用し、サヌカイトや黒曜石はあまり出土しません。

サヌカイトと黒曜石は遺跡周辺には存在しない石材です。サヌカイトは大阪府と奈良県の境にある二上山や香川県の金山・国分寺あたりに大きな産地があります。醍醐遺跡のサヌカイトもこれらのいずれかから運ばれてきたと考えられます。どちらにしても大変遠い距離です。黒曜石は、天然ガラスと呼ばれる黒色で光沢をもつ石で、近畿地方でこの石を産出する場所はありません。黒曜石の産地には、長野県和田峠・霧ヶ峰、北海道白滝・十勝、東京都神津島、神奈川県箱根、島根県隠岐、大分県姫島などがあります。

米原市磯山城遺跡や筑摩佃遺跡でも、黒曜石が出土しており、蛍光X線分析の結果からは、早期の磯山城遺跡の黒曜石は、島根県隠岐から運ばれ、中期の筑摩佃遺跡では長野県や神津島方面から運ばれてきていることがわかっています。この成果から判断すれば、醍醐遺跡は縄文時代中期に遺跡の中心があることから、長野県の方から運ばれてきた可能性が高いといえます。

土器の中にも長野県から運ばれてきたと思われるものが存在しています。その土器は、中期後半の隆帯で渦巻文を貼り付け、その間を沈線で綾杉文を描く唐草文様系土器と呼ばれています。尾根を越えた米原市起し又遺跡でも類似した土器が出土し、琵琶湖岸の米原市磯山城遺跡は中期前半の長野県の土器が出土するなど縄文時代中期の湖北地域は、中部高地とのつながりを深めています。

7. おわりに

以上みてきたように、醍醐遺跡は古くから知られた近畿地方の縄文時代中期を代表する貴重な遺跡です。出土した土器や石器などの遺物や立石をもつ配石遺構などの遺構は、当時の縄文人の生活の一端を明らかにすると共



中部高地の土器（唐草文様系土器）

に、縄文時代の人々が西へ東へと広範囲な物資を獲得し、他地域の人々とも交流をもっていたことも明らかにしました。

滋賀文化財教室シリーズ No.221号

発行年月日 2007年3月9日

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525